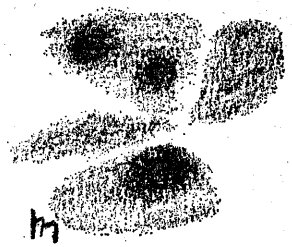

道徳教育と意図の心理学

吉田章宏

道徳教育についての論議には、道徳教育そのものが必要かどうかの問題と、特設時間が必要かどうかの問題の二つに分けることができます。今日では、子どもの道徳性を育てるための教育的働きかけとしての広義の道徳教育を無用とする人はほとんどいません。学校教育全体が道徳教育であるべきだとか、生活指導あるいは特別教育活動がそれに当たるべきだという論も、右の意味での道徳教育の必要性は認めているわけです。

さて、次に、特設時間の問題ですが、これもすでに議論の段階は終わって、全国の小・中学校で時間が設けられているのが現状です。しかも、特設時間は道徳の問題を直正面からとりあげて計画的組織的に教育する時間であると考えれば、その他の教育活動と相補うものとして、その積極的意義を認めてよいと思います。そこで、問題の中心は、必要かどうかから、何をいかにの問題に移っていきます。ここでは、広い意味での道徳教育の「何をいかに」の問題を、その根本から規定している人間観、ひいては道徳観について、心理学の立場から考えてみたいと思います。

× × ×

教育についてのいかなる考え方にも、その底には必ずある一定の人間観というものが秘められているものです。道徳教育はいわば教育の中心ともいうべきものですから、当然このことが妥当します。人間観を哲学や文学に求める場合もあるでしょう。しかし、もし、それを現代の心理学に求めるとしたら、どういうものが与えられるでしょうか。

心理学には昔からモデルという考え方があります。人間の心や行動を理解するのに、ある模型によって考えて行くやり方です。

現在、心理学で流行しているモデルには、大きく分けて三つあります。

1、機械モデル
2、動物モデル
3、赤ん坊モデル

1の機械モデルとは、人間を精巧な機械のようなものだとする考え方です。これはアメリカ心理学で特に盛んな考え方です。アメリカ文化は活動的行動的であり、技術を重んずることと関係があるかもしれません。ピストルの引き金を引くと弾丸が出る、それと同じように、人間にある刺激を与えると複雑な行動を始めるというわけです。非常に精巧で複雑にできており、現在あるどんな機械もかなわないほどだとはするのですが、本質的にはやはり同じだというのです。たしかに最近は、人間よりもずっとすばやく複雑な計算をする電子計算機や、ひとりで仕事をやってしまうオートメーションのような機械ができるようになりました。人間が機械にとって代わられるというだけでなく、将来は人間よりも精巧な機械ができるようになるかもしれません。そうした機械のことがわかるようになれば、本質的には機械と同じだとされる子どもたちの教育も、もっと能率よく行なえるようになるかもしれません。

こうした考え方の心理学は、現在はまだ道徳教育というような高いレベルの問題を扱うところまでには至っていません。しかし、たとえば、人間の思考を計算機のモデルを使って研究するというところまではすでにきているのです。しつけにより子どもの行動が変化することにしても、この考え方からすれば、ちょうど、機械の真空管や歯車をとりかえたり、ギヤーを入れかえたり、ダイヤルを回したりしたことによってその動きが変化するということと同じだと考えうるでしょう。

2の動物モデルとは、心理学研究者が実験室で好んで使うねずみや猿その他の動物についての研究から出てきた考え方です。この考えによると、人間の行動は本質的に動物の行動と同じだとされます。動物について発見された法則によって、人間の行動も説明されるわけです。たとえば、効果の法則、つまり試行錯誤のなかで満足のいくような効果をもたらす動作が残り、他が消えていくという法則があります。

これは元来、動物の学習について研究した結果出された法則です。人間について発展させた結果、最近流行のティーチングマシンが生まれました。ティーチングマシンの成功にもみるように、この考え方にもたしかに有効な面があるようです。子犬をしつけるときにも、子どもをしつけるときにも効果の法則は有効です。良いことをすればほめて

やり、悪いことをすればしかるという風にしつけてやればうまくいくでしょう。その後は、子犬も子どもも、しつけられた通りに行動することになるでしょう。たしかに人間と動物はその意味で似ていないわけではありません。しかし、ある目的を目ざすような行動はどう考えるべきでしょうか。動物モデルを採る人々はそのことも考えています。動物も目的をめざす行動を示すことがあるからです。

「あるサインがあると、有機体はいつもの通り行動すれば、ある目標があらわれるということを期待する。そして、もし目標に達すれば、その期待は強められること になるし、もし達することができなかったら、その次からは行動をかえるかもしれない。」という期待の原理がそれです。これまで知っている手がかりに結びついた「期待」に従って行動することが、すなわち目的を目ざす行動だというわけです。ここでいわれている期待には、サイン・手がかりが直接的に結びついていることに注意しておきましょう。子どもは、単にしつけられた通りの行動を反射的にするだけではなく、ある手がかりから、これこれの行動をすれば、たとえば、ほめられるだろうと期待して行動します。これは餌の目じるしを発見して、それをたどって餌にたどりつく、ねずみや犬の行動となるほど似ていないことはありません。この考えからすれば、道徳教育の問題も、要するに、行動そのものを学習させるしつけと、手がかりを覚えさせ、それにもとづく期待に従った行動を学習させることに帰してしまうわけです。

さて、第三の赤ん坊モデルです。

赤ん坊はわがままな存在です。したいことをすぐにしなければ泣きわめきます。いわば「衝動のかたまり」といっていいかもしれません。それが成人すると、他人と協力し、社会性をもち、自分を殺して他人を助けたりするようになります。赤ん坊は成人すると全く別人になったかのようです。しかし、赤ん坊モデルの考え方を採る人は、この変化をごく表面的なものだと考えます。人間は本質的には赤ん坊なのだというのです。

たとえば、成人の社会化された愛他的な行動の底には、禁止された性欲衝動があると説明したり、他の行動も、攻撃・破壊・死の衝動によって説明したりします。とくに、幼児期の経験を非常に重視します。成人してからの行動も、幼児期の経験から理解しようとします。人の性格の構造は、オシメをしなくなるまでの間にほとんどできあがってしまうと考えます。幼児期の肉親の愛情によりはぐくまれた、やさしさや愛の本能が道徳性の基礎であるなどとするわけです。この考えに従えば、道徳教育を学校教育の段階になってから考えるのでは全くおそすぎることになります。

道徳教育を真剣に考える人は、まず、赤ちゃんのあやし方から研究せよということになりそうです。たしかに、おとなにも「退行」といって、子どものような態度をとるようになる現象がありますし、幼児期の経験が精神的外傷として後まで残るという例もあります。しかし、ここでの問題は、人間の本質は赤ん坊と同じで、道徳性はそれをメッキするかざりにすぎないかどうかということでしょう。赤ん坊モデルを採る人は、そうだというのです。

さて、現代心理学で流行している人間観、人間のモデルは、大きく分けて以上の三つにまとめることができますが、道徳教育との関連で考えた時、これらのモデルをどう評価すべきでしょうか。

道徳教育の問題を考えている人の中には、これらのモデルをばかげているといってお笑いになる方があるかもしれません。しかし、これらのモデルが現代心理学の中で流行していることは動かせない事実です。それゆえ、もし道徳教育の基礎となる人間観、あるいはその心理学的基礎を「科学的心理学」に求めるとすると、知らないうちにいつのまにか、三つのモデルのどれかを採り入れることになっているかもしれないのです。ただ、笑っているだけですませるわけにはいきません。笑うとすれば、そこに何が欠けているのかをはっきり指摘しなければなりません。

三つのモデルは、それぞれの限界の中でたしかに有効性をもっています。工場では、人間を機械の一部と考えることにより能率をあげるのに成功しています。教室では、人間は動物と同じだと考えてできたティーチングマシンで、子どもは能率的に勉強しています。病院では、一部の精神病医は人間は赤ん坊と同じだと考えて、病める人々を救ってきました。

しかし、人間には、これらのモデルでは扱いきれない側面があるのではないでしょうか。

それはどんな側面でしょうか。

それは、ここで問題となっている道徳性に関係した側面です。

人間の意図の問題です。

人間の行動は、彼のもつ意図によって導かれるという側面をこれら三つのモデルは見ていないのです。

意図をここでは「個人がなそうと試みつつあること」と簡単に定義しておきましょう。

機械でも、非常に精巧に作られてあれば、種々の条件下でその場に適応した行動をとることができるようになるかもしれません。「……日常生活の基本的な行動様式をよく理解し、これを習慣づけるとともに、時と所に応じて適切な言語・動作ができる……」ようになるかもしれません。

しかし、道徳的な行動に特徴的な努力の方向を保持するということは、機械にはできないでしょう。動物モデルにしても同じです。しつけや行儀といったレベルの問題はこのモデルで扱えます。また、何かを手がかりとしてある目標へむけて努力するという事実までは扱えるかもしれません。しかし、なお人間の行動を理解するには限界があります。動物モデルは動物にあてはまっても、人間にはアナロジーとしての意味しかないのです。人間の場合、ある人のもっている期待と過去における経験を知っても、それだけでその人の行動を統御したり予言したりすることはできません。これは、一見奇妙なことです。しかし当然なのです。彼の行動は期待によってではなく、彼のもつ基本的意図によって定められているからです。しかも、この基本的意図は過去の経験そのままの写しなんかでは決してないのです。動物は文化を持たない、社会を持たない、ことばをもたない、労働をしないということももちろん指摘できます。しかし、道徳教育との関連で考えるとき、動物と人間の最も大きなちがいは、動物が刺激に結びついた「期待」の生き物であるのに、人間は「意図」の生き物であるということだといわなければなりません。人間の動機の構造と、動物の動機の構造は、もし似ているとしても、それはほんの少しです。さて、次の赤ん坊のモデルにしても同様です。子どもでさえ、すでに赤ん坊とはちがいます。ある意図に基づいて長い間ある方向への努力をつづけることができるのです。意図は特定の目標がなくとも、行動を一定方向に向ける働きを果たします。赤ん坊と子どもでは動機の質が変化してきているのです。

要するに、これまで見てきたモデルは過去における適応の問題だけから現在の行動を考えていました。しかし、人間の行動は、それだけではなく、未来へ向けられている意図によって規定されているのです。

この見方のちがいは、パーソナリティを反応傾向のセットとみなすか、主観的価値のセットとみなすかのちがいとなってあらわれてきます。前の考えからは、せいぜいのところ、できあがってしまった道徳性についてしか理解できないのに対して、あとの考えからは、道徳的な潜在力、将来どういう道徳性を身につけうるかまでも明らかにすることができるわけです。

道徳の本質について、「従属の道徳」か「発展の道徳」かということがよくいわれます。しつけ・親孝行・愛国心を「たたき込む」という道徳観と、「より豊かにより幸福に生きようとする人間の自然な欲求を認め、困難な事情の中で生きる人間の弱さを暖かく理解した上で、人間性を尊重し、社会生活を全体として発展的に改造していくことを

めざす……。」という道徳観のちがいです。この二つの道徳観の底にも、やはり、人間が過去のみに規定されて生きる生き物か、未来へ向けての意図により規定される生き物であるかという、二つの人間観のちがいがあるように思われます。

非行少年や犯罪者を、単に悪い習慣形成の結果生まれたものだと理解して、習慣を矯正しようとしても結局は失敗するということです。彼らの意図が変化しなければ、努力を続ける力が出てこないのです。これも、人間を機械・動物・赤ん坊のレベルで考えているか、人間を人間として、意図の生き物として考えているかの違いからでてくるといえるのではないでしょうか。

人間のもつ意図、これこそは道徳の本質である長い射程をもった努力の方向づけの基礎である、といわなければなりません。

青少年期の子どもが、たとえば、成功してひとかどの人物になりたいと思うようになったとします。この場合、この子どもは、そのために具体的には何をしたらよいか、必ずしも知りません。しかし、ひとかどの人物になろうという一般的目的はすでに彼のものになっているのです。そして、その後の努力はこの目的・意図をめぐって展開することになります。意図が具体的目標より先に現われ、しかも目標を規定するようになるのです。

道徳的行動の本質も、こういった種類の行動ではないでしょうか。人間の、少なくとも青少年期以降には、こうした種類の行動が現われてくるということは事実として認めてよいでしょう。

さて、ガイダンスと道徳教育、しつけと道徳教育、特別教育活動と道徳教育、生活指導と道徳教育——と並べたときに、道徳教育が果たすべき特別な役割は何でしょうか。

ここで、人間が意図の生き物であるという事実に注目すべきだと思います。

日常生活の中での正しい習慣形成ももちろん大切なことです。他の教育活動と並んで、道徳教育の中でも行なわれなければなりません。さまざまの活動、日常生活の中で形成される自主性・協力性・社会性・忍耐・不屈などの性格はたしかに大切です。しかし、道徳教育でしか行ないえない教育的働きかけがもう一つあることも忘れられません。それは、一般的目標の設定に関係する教育的働きかけの問題です。意図の形成に関係した問題です。

今日の道徳教育では、日常的現実生活から離れた理想の問題はできるだけ扱わず、日常の学校・家庭生活に密接した問題を扱って、身についた道徳性を育てようとする傾向が強いようです。この傾向は、昔の修身教育、あるいは徳

目主義への反発などから生まれてきているものと思われます。そして、それはたしかに一応よい傾向だといえるでしょう。

しかし、子どもは成長するにつれて、さきにあげた三つのモデルにはおさまりきれない側面を示すようになってきます。意図をもつようになってきます。理想をもつようになってきます。教育でこの問題を扱う扱わないにかかわらず、そうなってくるのです。意図は自分についての自我像とか、目ざすべき理想像の形をとって現われてきます。そして、そういう理想像や自我像は、子どもの行動を規定する力をしだいに増してくるのです、このことを無視することは、子どもの実生活に目をつぶることになるでしょう。日常生活に結びついた道徳性も、自我像・理想像に裏づけられ支持されて初めて着実で強力なものになるのです。もし逆に、それらの間のくいちがいが大きいときには、せっかくそれまで形成された習慣もくずれてしまうことさえありうるのです。この事実こそ、動物とちがって、意図の生き物である人間の大きな特徴なのです。もちろん、理想像にしても、決して宙に浮いたものであってはなりません。しかし、日常生活に密着することのみ重視することは、結果的には、かえって高次の人間心理を見のがすことになるのです。

たとえば、現代の子どもの英雄像・理想像の問題をとりあげてみましょう。

今日の教科書は、戦前の国定教科書と比べてみると、英雄像・理想像を提示することにあまり積極的だとはいえません。学校の教育活動もおそらくそうだと思われます。ところが一方、マスメディアは一日も休まず、大量の理想像・英雄像を子どもたちに向かってたたきつけているのです。今日の子どもは専らマスメディアを通して、その理想像を形成しているようです。学校教育は子どもたちの理想像を育てる場としての役割を放棄して、マスメディアその他の学外の世界に譲り渡してしまったかのようです。マスメディアの与える理想像は、かつての国定教科書の中で与えられていた理想像のように固定的でもありませんし、一方的に与えられるものでもありません。マスメディアの内容は子どもたちの人気のよしあしに左右されるという側面をもっているからです。子どもたちは、理想像を自分たちで選びとっていきます。このことには良い面もあれば、また、悪い面もあります。子どもたちが自分たちで考えるという良い面の裏には、子どもたちの視野の狭さ、射程の短さからくる限界を越えられない、という悪い面があるのです。

子どもの理想像についての、ある報告の中では、次のようにいわれています。

「権威的でなく内在的、絶対的でなく相対的、抽象的

でなく具体的、それが今日の子どもたちのモラルの大きな特徴である。彼らが英雄像を受け入れ、理想を学びとる過程にも、この判断が大きな力を示している。」(注1)

そして、このモラルに対して「大きな社会のイメージが十分にとらえられていないのではないか」という危惧の念が述べられています。学校の外にほうり出された理想像の問題にはまだ満足のいく解決が与えられていないのです。

「民主的な社会および国家の成員として、必要な道徳性を発達させ、よりよい社会の建設に協力しよう。」という道徳教育の目標があります。一方、現実の子どもたちは、テレビの人気者を尊敬し、憧れています。運がよくなること、「ツク」ことを願ったりしています。高い理想を滑稽視したり、日常的功利的な人間関係以外の「社会的目的」の実在を疑ったりしているのです。こうした子どもたちの視野の狭さ、射程の短さ、現実主義の悪い面が学校教育の中で強められはしても正されることがないとしたら、右の目標は空文に化してしまうのではないでしょうか。子どもの道徳性を育てる上で、生き生きとした理想像の果たす役割は非常に大きいのです。理想像の問題は、決して単に理想像の問題だけにとどまってはいません。子どもはしつけられた通りに行動する動物モデルの段階から、意図・理想像に従って行動する段階へと発達します。その時、マスコミの与えた理想像が、学校での日常生活に密着した地味な道徳教育を裏切る結果になる恐れさえあるのです。道徳教育はこの事実を無視してはなりません。いや、無視しないというにとどまらず、むしろその中にこの事実を積極的に取り入れて行くべきです。発達段階に応じて理想像のあり方を子どもとともに考え、子どもの生活と結びつけながらも、しだいに子どもの視野を広げ伸ばしてやるということは、道徳教育の果たすべき最も重要な役割の一つではないでしょうか。

意図の問題は、人間による未来の観念的先取りの問題、あるいは、見通し路線、将来を見通した志向の問題といいかえることもできます。

「目的までの距離および目的達成の困難さにおいて、見通し路線にはさまざまなものがある。近い見通し——それは比較的容易に達成される近い目的への志向である。中間の見通しにとって特徴的なことは、目的がより遠くにへだたっていること、それを達成するためには、より多くの努力とある困難の克服が要求されることである。遠い見通し——それは大きな社会的意義をもった高い生涯の目的に向けられた志向である。それを達成するためには、人は自分の全力、全生活をささげる。」

「人間の性格は、より遠くの将来を見通した目的のためのたたかいのなかで鍛えあげられる。人の行動がただ単に

もっとも近い目的によってのみ決定づけられ、その目的の向うにある遠い見通しを彼がつけていない場合には、彼のうちには、自分の生涯の途上にある障害を克服するための十分な欲望も力もおこってこない。」（注2）

近い見通しが意義をもたないというのではありません。より遠くの目的達成のためには、より近くの目的を達成することが必要なことはいうまでもありません。ただ発達段階に応じて、近い見通しだけでなく、見通し路線の体系をしだいに子どもに形成させることが大切なのです。なぜなら、人間は意図の生き物だからです。

道徳教育との関連で心理学が反省すべきことは、今日流行の心理学が、意図つまり、人間の未来への志向性の問題を十分扱っていないということです。道徳教育がもしこれにたよるとすると、既存の社会への適応の問題だけを考えて、社会をよりよくしていこうという意図の問題を見落とす恐れ、従属の道徳に陥り、発展の道徳に達し得ない恐れがあるということです。

人間は意図の生き物です。

心理学が、将来、人間を〝意図の生き物〟として、「人間モデル」によって理解し、道徳教育が、その「人間モデル」によって基礎づけられる日が来るのを待ちたいと思います。

（東京大学大学院＝教育心理学）

〈文　献〉

G. W. Allport : "Scientific models and human morals." in Personality and Social Encounter 1960 Beacon Press.

（注1）「子どもの生活と道徳」p.120 現代教育学15 岩波書店

（注2）スミルノフ主監 心理学II p.201 明治図書

学校でも家庭でも 考え方解き方 で勉強を！

慶応義塾幼稚舎 林 佐一著
算数 価 三五〇円

お茶の水女子大学付属小学校 石田 佐久馬著
国語 価 三〇〇円

東京学芸大学付属小学校 古川 清行著
社会 価 三四〇円

東京学芸大学付属小学校 伊藤 民男
東京都黒門小学校 上村哲四郎 共著
理科 価 三六〇円

圧倒的好評・重版！

金子書房